



## 令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第3号

令和7(2025)年6月20日  
栃木県農業総合研究センター  
環境技術指導部

### 高温性の病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間 6月下旬～7月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

#### 1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや少ない**
- (2) 根拠 ・ 向こう1か月の気温は高く (-)、降水量は少ない (-)。  
・ BLASTAM(6月中旬)では、一部の地点で感染好適条件が連続して確認された(+).
- (3) 対策 ・ 葉いもちの初発時期(6月中下旬)以降、ほ場をよく見回り、早期発見に努める。  
・ 発生が見られる場合は、ダブルカットフロアブル(RACコードF:16.1、24)等、予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・ BLASTAM(いもち病発生時期予測システム)の情報、薬剤感受性検定結果を当センターホームページ(HP)に掲載中。

#### 2 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **平年並**
- (2) 根拠 ・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は少ない (+)。  
・ 昨年9～10月の再生稲調査での本病の発生は平年並(ほ場率:68%、株率:4%)(±)。  
・ 大麦におけるヒメトビウンカの密度はやや少ない(平年比35.5%)(-)。
- (3) 対策 ・ 昨年発病の多かった地域では、本田期防除を実施する。
- (4) 備考 ・ 県内の保毒虫率は低下傾向であるが、コシヒカリなど縞葉枯病に抵抗性を持たない品種を作付けした常発地域では、発生に注意する。  
・ 令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.13をHPに掲載中。

#### 3 いちご(親株・育苗) ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並(±)。  
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は少ない (+)。
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗段階での防除を徹底する。  
・ 薬剤感受性の低下を防ぐため、気門封鎖剤を活用するとともに、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備考 ・ ハダニ類薬剤感受性検定結果をHPに掲載中。

#### 4 トマト コナジラミ類(黄化葉巻病(TYLCV))

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや多い(+)  
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は少ない (+)。
- (3) 対策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。  
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。  
・ 発生が見られた場合は、アニキ乳剤(I:6)等を散布する。  
・ 黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
- (4) 備考 ・ 病害虫防除対策のポイントNo.22、タバココナジラミ類薬剤感受性検定結果をHPに掲載中。

#### 5 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量はやや多い(+)  
・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は少ない (-)。
- (3) 対策 ・ 定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のためRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
・ 発生を確認したら、ナリアWDG(F:11, F:7)等を散布する。

## 6 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや少ない（－）。  
・ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は少ない（＋）。
- (3) 対 策 ・ 4mm目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。  
・ 山林に近い園地や過去に被害の大きかった園地では、特によく観察し、発生を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、薬剤散布を行う。
- (4) 備 考 ・ 気温および湿度の高い日には、夜間の飛来量が増加するおそれがあるため注意する。  
・ 令和7(2025)年度植物防疫ニュースNo. 7、薬剤感受性検定結果をHPに掲載中。

## 7 なし ナシヒメシクイ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 越冬世代成虫の誘殺数は多い（＋）。  
・ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は少ない（＋）。
- (3) 対 策 ・ 卵及び食入前のふ化幼虫を対象に薬剤散布を行うと効果が高いため、第一世代成虫の発生ピークから7～9日後を目安に薬剤散布を行う。  
・ 果実や新梢に食害が見られた場合は速やかに摘果またはせん除を行い、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ 令和7(2025)年度植物防疫ニュースNo. 6、ナシヒメシクイの誘殺数グラフをHPに掲載中。

## 8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
水稻	紋枯病	－	<b>やや多</b>	野菜類	ハスモンヨトウ	平年並	<b>やや多</b>
いちご	炭疽病	少	<b>やや少</b>	なし	黒星病	平年並	<b>やや少</b>
トマト	葉かび病	やや多	<b>平年並</b>	きく	ハダニ類	やや少	<b>平年並</b>

### 【 季節の病害虫防除対策 】

#### ○施設栽培の病害虫

- ・ トマト、きゅうり、いちご等の施設栽培では、栽培終了時にハウスの密閉蒸し込みを行うなど、施設内の害虫を野外へ「出さない」対策を徹底しましょう。特に、コナジラミ類はトマト黄化葉巻病(TYLCV：タバココナジラミ)やトマト黄化病(ToCV：タバココナジラミ、オンシツコナジラミ)を媒介し、ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、注意が必要です。
- ・ 施設栽培作物の栽培終了後は、次作に向けて土壌消毒を実施しましょう。植物残さ内の病原菌は消毒されにくいので、ほ場から植物残さを持ち出す等、適切に処分しましょう。また、効果的な土壌消毒の実施のためには、十分な耕起、碎土の実施や、適度な土壌水分管理が重要です。  
詳細は、栃木県農作物等病害虫雑草防除指針の技術情報を御確認ください。

#### ○うめ・もも・すもも等 クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・ クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、レンガ色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業総合研究センター防除課まで御連絡ください。
- ・ 令和7(2025)年度植物防疫ニュースNo. 5をHPに掲載中です。

#### ○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・ 本県のトマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- ・ 令和7(2025)年度植物防疫ニュースNo. 3をHPに掲載中です。

#### ○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は本県での発生は確認されていませんが、令和7(2025)年6月18日現在、全国36都道府県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。健全な種苗を導入するとともに、早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・ サツマイモ基腐病に注意！をHPに掲載中です。

## 【 農薬の安全使用等 】

### ○農薬危害防止対策

- ・ 6～8月は「農薬危害防止運動」の実施期間です。
- ・ 農薬は適正に保管・管理しましょう。
- ・ 農薬容器のラベルに記載された内容を確認して使用し、農薬による事故等の発生を防ぎましょう。
- ・ 薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

### ○薬剤抵抗性発達の抑制

- ・ 薬剤で防除する際には、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

### ○有用生物への影響に留意

- ・ 花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

### ○春の農作業安全確認運動

- ・ 4月～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。
- ・ 農業機械の転落・転倒対策、熱中症予防対策、安全意識の向上のための対策等を徹底し、農作業安全に努めましょう。

### 1か月気象予報（予報期間6月21日から7月20日 6月19日気象庁発表）

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。太平洋高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	10	80
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ

（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます。

カメムシ防除作戦のホームページも御確認ください

（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html>）。





# 令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第4号

令和7(2025)年7月18日  
栃木県農業総合研究センター  
環境技術指導部

## 高温性の病害虫の発生増加に注意しましょう。

予想期間 7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 水稲 紋枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比 75.7%、株率：平年比 23%）（±）。  
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（-～±）。
- (3) 対策 ・ 薬剤を散布する場合は、穂ばらみ期～出穂期に株元によくかかるようにモンカットフロアブル（F:7）等を散布する。ただし、例年より早くから発生が見られ、発病株率が高い場合や病斑の上位進展が激しい場合は、薬剤散布を2回行うようにする（1回目散布：幼穂形成期～穂ばらみ期、2回目散布：穂ばらみ期～出穂期）。

### 2 水稲 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ）

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根拠 ・ 7月上旬の雑草地等すくい取り調査での発生量は多い（捕獲頭数 平年比：211.5%）（+）。  
・ 7月上旬の水田すくい取り調査での発生量は多い（捕獲頭数 平年比：233.3%）（+）。  
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ 早植コシヒカリの出穂期は県平均で7月21日と前年より早い見込みであるため、適切な時期に防除する。  
・ 斑点米の発生を抑制するため、出穂期7～10日後頃（穂ぞろい期～乳熟初期）に液剤で防除する。その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、イネカメムシの発生地域では、不稔を抑制するため出穂期に液剤による防除を行う。  
・ 周辺より出穂が早い、または遅い品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。  
・ 斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。
- (4) 備考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.8](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第2号（水稲・イネカメムシ）](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第3号（水稲・斑点米カメムシ類）](#)、[イネカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[病害虫防除のポイント No.16](#)、[No.23](#)を当センターホームページ（HP）に掲載中。

### 3 いちご（育苗）炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比 158.3%）（±）。  
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（-～±）。
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。  
・ 予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
・ 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。  
・ 発病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。
- (4) 備考 ・ [植物防疫ニュース No.10](#)、[病害虫防除対策のポイント No.21](#)をHPに掲載中。

### 4 いちご（育苗）ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比 112.9%、株率：平年比 90.5%）。（±）  
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。  
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
- (4) 備考 ・ ハダニ類は葉裏に寄生するため、薬剤散布時は葉液が葉裏に付着するように散布する。  
・ [ナミハダニ（いちご）の薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

---

## 5 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや多い (+)。  
現在の発生量はいちごでやや多い(ほ場率：平年比 475%) (+) が、きく、なす及びトマトで少ない (-)。  
向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 葉裏をよく観察し、早期発見に努める。  
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちにトルネードエース DF(I:22A) (だいず、いちご、トマト、ナス等) やマッチ乳剤(I:15) (いちご、トマト、きく等) 等で速やかに防除する。  
・ 抵抗性発達防止のため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
・ 施設開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。  
・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- 

## 6 だいず・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや多い (+)。  
・ 現在の発生量はトマトで少ない(ほ場率：平年比 0%) (-)、なすで多い(ほ場率：平年比 406.1%) (+)。  
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。  
・ 食害痕等を発見したらプレオフロアブル(I:UN) (だいず、いちご、トマト、なす、きく等) やヨーバルフロアブル(I:28) (いちご、トマト、なす) 等で速やかに防除する。  
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。  
・ 施設開口部に 4 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。  
・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。  
・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。
- 

## 7 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(ほ場率：平年比 290.9%) (+)。  
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。  
・ 天敵製剤の活用や土着天敵の保護利用に取り組む園地では、天敵に影響のある薬剤の使用をできるだけ控える。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ\(園芸作物\)の薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。
- 

## 8 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い(ほ場率：平年比 202.1%、株率：平年比 233.3%) (+)。  
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (-~±)。
- (3) 対 策 ・ 予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
・ 発生が見られた場合、スコア顆粒水和剤(F:3)等の治療効果の高い薬剤を散布する。
- 

## 9 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ フェロモントラップへの誘殺数はやや少ない (-)。  
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±~+)。
- (3) 対 策 ・ 4 mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。  
・ 山林に近い園地や過去に被害の大きかった園地では、飛来状況を特によく観察し、発生を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、薬剤散布を行う。
- (4) 備 考 ・ 気温および湿度の高い日には、夜間の飛来量が増加するおそれがあるため注意する。  
・ [令和 7 \(2025\) 年度植物防疫ニュース No. 7、チャバネアオカメムシの薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。
-

## 10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稲	いもち病	やや少	やや少	なし	黒星病	平年並	平年並
	縞葉枯病	平年並	やや多		ナシヒメシクイ	やや多	多
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	りんご	褐斑病	多	やや多
トマト	コナジラミ類	やや多	多		ハダニ類	少	やや少
ねぎ	アザミウマ類	平年並	やや多	きく	ハダニ類	やや少	平年並

### 【 季節の病害虫防除対策 】

#### ○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- ・野菜類や花き類では、ほ場内外の雑草はハダニ類やコナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な除草で、害虫が発生しにくい環境を作りましょう。

#### ○定植前・定植時の防除の徹底

- ・いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。
- ・定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- ・施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- ・イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。

#### ○トマト黄化葉巻病（TYLCV）の防除対策

- ・TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。夏秋トマトで黄化葉巻病が発生したほ場では、残さに寄生している媒介虫を施設外に「出さない」対策を徹底しましょう。

#### ○うめ・もも・すもも等 クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、レンガ色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業総合研究センター防除課まで御連絡ください。
- ・[令和7（2025）年度植物防疫ニュース No. 5](#)を当センターHPに掲載中です。

#### ○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・本県のトマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- ・[令和7（2025）年度植物防疫ニュース No. 3](#)をHPに掲載中です。

#### ○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和7（2025）年7月現在、全国36都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・[サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

### 【 農薬の安全使用等 】

#### ○農薬危害防止対策

- ・6～8月は「[農薬危害防止運動](#)」の実施期間です。
- ・農薬は適正に保管・管理しましょう。
- ・農薬容器のラベルに記載された内容を確認して使用し、農薬による事故等の発生を防ぎましょう。
- ・薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

#### ○薬剤抵抗性発達の抑制

- ・薬剤で防除する際には、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

#### ○有用生物への影響に留意

- ・花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間7月19日から8月18日 7月17日気象庁発表）

期間中は、気温がかなり高くなる見込みです。降水量は平年並か少なく、日照時間は多くなるでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	30	60
降水量	40	40	20
日照時間	20	30	50

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます。

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使しましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ・農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！



# 令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第5号

令和7(2025)年8月25日  
栃木県農業総合研究センター  
環境技術指導部

## 害虫と高温性病害の増加に引き続き注意しましょう。

予想期間 8月下旬～9月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 水稲 斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ)

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 7月下旬の水田におけるすくい取り調査での発生量は平年並 (成幼虫数 ほ場率：平年比 95%、頭数：平年比 106%) (±)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±～+)。
- (3) 対 策 ・ 出穂期の薬剤防除後も発生が多い場合は、7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。
  - ・ 周辺のほ場と出穂時期が異なる品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。
  - ・ 斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。
- (4) 備 考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.8](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第2号\(水稲・イネカメムシ\)](#)、[令和7\(2025\)年度病害虫発生予察注意報第3号\(水稲・斑点米カメムシ類\)](#)、[イネカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[病害虫防除のポイント No.16](#)、[No.23](#)を当センターホームページ (HP) に掲載中。

### 2 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い (+)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±～+)。
- (3) 対 策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期 (9月下旬) までにトレボン乳剤 (I:3A) 等を10～14日間隔で散布する。

### 3 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 93%、株率：平年比 100%) (±)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高い (+)。
- (3) 対 策 ・ 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
  - ・ 本ぼへの罹病株の持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
  - ・ 発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理 (罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する) 後に処分する。
- (4) 備 考 ・ [イチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果](#)、[令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.10](#)をHPに掲載中。

### 4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 125%、株率：平年比 103%) (±)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±～+)。
- (3) 対 策 ・ 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル (I:23) をかん注する。なお、天敵を導入するほ場では、天敵への影響日数 (45日) に注意して使用する。
  - ・ 定植苗の高濃度炭酸ガス処理を適切に行う。
  - ・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

### 5 トマト コナジラミ類 (黄化葉巻病 (TYLCV)、黄化病 (ToCV))

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量はやや多い (+)。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く (+)、降水量は平年並か少ない (±～+)。

- (3) 対策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窗）に0.4mm目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。
- ・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
  - ・ 発生が見られた場合は、アニキ乳剤(1:6)等を散布する。
  - ・ 黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
  - ・ 発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
- (4) 備考 ・ [病害虫防除対策のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ類薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

## 6 ねぎ シロイチモジヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い（+）。
- ・ 8月第2半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い（+）。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉（葉が白く透けて垂れ下がる）を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
- ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。

## 7 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 8月第2半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い（+）。
- ・ 現在の発生量はだいず、いちご、なすで多い（+）。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ 葉裏をよく観察し、早期発見に努める。
- ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
  - ・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
  - ・ 施設開口部に4mm目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
  - ・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- (4) 備考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)をHPに掲載中。

## 8 だいず・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 8月第2半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い（+）。
- ・ 現在の発生量はトマトで平年並（ほ場率：平年比97%）（±）、なすで多い（ほ場率：平年比236%）（+）。
  - ・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ 新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。
- ・ 食害痕等を発見したらアニキ乳剤(1:6)（いちご、トマト、なす、きく等）やプレバソンプロアブル5(1:28)（だいず、トマト、なす等）等で速やかに防除する。
  - ・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
  - ・ 施設開口部に4mm目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
  - ・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。
  - ・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。
- (4) 備考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)をHPに掲載中。

## 9 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い（ほ場率：平年比214%、葉率：平年比357%）（+）。
- ・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（±～+）。
- (3) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
  - ・ 天敵製剤の活用や土着天敵の保護利用に取り組む園地では、天敵に影響のある薬剤の使用をできるだけ控える。
  - ・ 品種によって収穫時期が異なるため、農薬の使用時期（収穫前日数）に十分注意する。

- (4) 備考・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.12](#)、[ナミハダニ\(園芸作物\)の薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

## 10 りんご 褐斑病

- (1) 発生予想・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 128%、葉率：平年比 200%）（+）。  
・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量は平年並か少ない（-〜±）。
- (3) 対 策・ 予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
・ 発生が見られた場合、ファンタジスタ顆粒水和剤(F:11)等の治療効果の高い薬剤を散布する。
- (4) 備考・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.11](#)、[リンゴ褐斑病菌の薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

## 11 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
だいず	べと病	平年並	平年並	なし	ナシヒメシクイ	やや多	多
なす	アブラムシ類	やや多	多	きく	アザミウマ類	やや多	多
りんご	斑点落葉病	やや多	やや多				

### 【 季節の病害虫防除対策 】

#### ○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- 野菜類や花き類では、ほ場内外の雑草はハダニ類やコナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な除草で、害虫が発生しにくい環境を作りましょう。

#### ○定植前・定植時の防除の徹底

- いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、**定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。**
- 定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- 施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。

#### ○トマト・なす等 トマトキバガ

- 県内の夏秋トマトでトマトキバガによる被害が発生しています。秋冬作においても、施設内に入れたい対策（防虫ネット等）を徹底し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュース No. 3](#)をHPに掲載中です。

#### ○かんしょ サツマイモ基腐病

- 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和7(2025)年8月現在、全国36都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- 健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- [サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHPに掲載中です。

### 農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

### 1 か月気象予報（予報期間 8 月 23 日から 9 月 22 日 8 月 21 日気象庁発表）

- ・ 6 月中旬以降、暖かい空気に覆われ、気温の高い状態が続いています。向こう 1 か月の気温も、暖かい空気に覆われやすいため、高い状態が続くでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 6 月下旬以降、高気圧に覆われ、降水量の少ない状態が続いている所があります。向こう 1 か月の降水量も、高気圧に覆われやすいため、平年並か少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	10	80
降水量	40	40	20
日照時間	10	30	60

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。病虫害情報発表のお知らせは X 栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。

～栃木県からのお知らせです～

#### 6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ・農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！



## 令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第6号

令和7(2025)年9月19日  
栃木県農業総合研究センター  
環境技術指導部

### 引き続き病害虫の発生に注意しましょう。

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

#### 1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(ほ場率：平年比141%、株率：平年比150%)(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。  
・ 発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理(罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する)後に処分する。
- (4) 備 考 ・ [イチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果](#)、[令和7\(2025\)年度植物防疫ニュース No.10](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

#### 2 いちご ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い(ほ場率：平年比231%、株率：平年比300%)(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 作物の各部をよく観察し、早期発見に努める。  
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫のうちにプレオフロアブル(RACコードI:UN)などを散布する。  
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。  
・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)をHPに掲載中。

#### 3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(ほ場率：平年比178%、株率：平年比113%)(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

#### 4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 9月第1半旬までの青色粘着板への誘殺数は平年並(±)  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 開花の早いほ場では、被害が発生・拡大しやすいため、花を注意深く観察し、発生が認められたら早期に薬剤防除する。  
・ 施設周辺の除草を徹底する。
- (4) 備 考 ・ 今後ハダニ類の天敵を導入するほ場では、防除薬剤の選択に注意する。  
・ [アザミウマ類の薬剤感受性検定結果・続報](#)をHPに掲載中。

#### 5 果菜類 コナジラミ類(トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV))・きゅうり：退緑黄化病(GCYV)

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量はトマトではやや多く(+)、きゅうりでは多い(+)  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。

- (3) 対策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窗）に 0.4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。
- ・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
  - ・ 発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
  - ・ トマト黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備考 ・ [病害虫防除対策のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ類薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。

## 6 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない（ほ場率：平年比 51%、株率：平年比 15%）（一）。
- ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）、日照時間はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
- ・ 窒素過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
  - ・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

## 7 ねぎ シロイチモジトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い（+）。
- ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉（葉が白く透けて垂れ下がる）を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫は見つけ次第捕殺する。
- ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\) 年度病害虫発生予察注意報第 4 号](#)を HP に掲載中。

## 8 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 9 月第 1 半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い（+）。
- ・ 現在の発生量は、だいずでは平年並（±）、なすでは多い（+）。
  - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 作物の各部をよく観察し、早期発見に努める。
- ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
  - ・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
  - ・ 施設開口部に 4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
  - ・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\) 年度植物防疫ニュースNo.13](#)を HP に掲載中。

## 9 だいず・いちご・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 9 月第 1 半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い（+）。
- ・ 現在の発生量はなすで多い（ほ場率：平年比 297%、株率：363%）（+）。
  - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。
- ・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
  - ・ 施設開口部に 4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
  - ・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。
  - ・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\) 年度植物防疫ニュースNo.13](#)を HP に掲載中。

## 10 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（±）
- ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、日照時間はほぼ平年並（±）の見込み。

- (3) 対策
  - ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
  - ・化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備考
  - ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

## 11 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	うどんこ病	平年並	やや少	なす	アザミウマ類	平年並	やや多
きゅうり	アブラムシ類	少	やや少	きく	アブラムシ類	少	やや少
	べと病	少	少				
	褐斑病	平年並	やや少				

### 【 季節の病害虫防除対策 】

#### ○水稲 縞葉枯病（媒介昆虫：ヒメトビウンカ）、黄萎病（媒介昆虫：ツマグロヨコバイ）、イネカメムシ、スクミリンゴガイ

- ・再生稲（ひこばえ）は、イネカメムシの秋の生息場所や餌になる他、縞葉枯病や黄萎病が発生したほ場では、媒介昆虫の増殖源および病原の獲得源になります。収穫後は速やかに、丁寧な耕起を行いましょう。
- ・スクミリンゴガイは秋から冬に水田の土中で休眠します。発生ほ場では、耕起により貝を破碎し、防除しましょう。また、厳寒期(1~2月)にも耕起を実施し、貝を寒風にさらすことで殺貝効果を高めましょう
- ・ヒメトビウンカやツマグロヨコバイの越冬場所をなくすため、畦畔等の除草を徹底しましょう。

#### ○麦類 種子伝染性病害

- ・オオムギ斑葉病や小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いましょう。

#### ○なし 黒星病・炭疽病、りんご斑点落葉病・褐斑病

- ・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。
- ・[ナシ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センター HP に掲載中です。

#### ○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和7(2025)年9月現在、全国36都道府県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・ほ場内をよく観察し、発病が疑われる場合は、農業振興事務所もしくは当センターにご連絡ください。
- ・[サツマイモ基腐病に注意!](#)を当センターHPに掲載中です。

#### ○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・本県のトマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白~褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- ・[令和7\(2025\)年度植物防疫ニュース No. 3](#)をHPに掲載中です。

### 農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

#### 1か月気象予報（予報期間9月20日から10月19日 9月18日気象庁発表）

向こう1か月は気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わるでしょう。

#### 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	10	80
降水量	30	30	40
日照時間	30	30	40

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課 (TEL 028-665-1244) までお問合せください。  
病虫害情報発表のお知らせはX栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。

# 令和7（2025）年度 病害虫発生予報 第7号

令和7（2025）年10月17日  
栃木県農業総合研究センター  
環境技術指導部

## 害虫が施設内に侵入しないよう、防虫ネット等で対策しましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

### 1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比101%、株率：平年比200%）(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 定植後でも潜在感染株等が萎凋・枯死することがあるため、注意深く観察する。  
・ 発病株やその周辺の感染が疑われる株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.21](#)、[いちご炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[植物防疫ニュースNo.10](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

### 2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比73%、株率：平年比172%）(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高い(+)見込み。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。  
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。  
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の密度を下げしておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の青色粘着板による誘殺数はやや多い(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)見込み。
- (3) 対 策 ・ 施設内外の除草を行う。  
・ 花をよく観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、スピノエース顆粒水和剤(I:5)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①、②](#)、[いちご情報第4号\(9月\)](#)を当センターHPに掲載中。

### 4 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比150%、株率：平年比83%、）(+)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。  
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。  
・ 予防を主体に、パレード20フロアブル(F:7)等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

### 5 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ トマト黄化葉巻病の現在の発生量はやや多い(+)。  
・ 現在のコナジラミ類の発生量は平年並(±)。  
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。

- (3) 対 策
- ・ 施設内外の除草を徹底する。
  - ・ コナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窗）に 0.4mm 目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
  - ・ 黄色粘着板の設置によりコナジラミ類の早期発見に努める。
  - ・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
  - ・ トマト黄化葉巻病では、耐病性品種であっても感染すると伝染源となる。トマト黄化病（ToCV）に感染することもあるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
  - ・ コナジラミ類は低密度の発生でもウイルスを媒介するため、発生初期に登録のある薬剤で防除する。なお、薬剤感受性の低下を避けるため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。また、タバココナジラミに対しては防除効果のある薬剤が限られるため、薬剤感受性検定結果等を参考にする。
- (4) 備 考
- ・ トマト黄化葉巻病はタバココナジラミが、トマト黄化病はタバココナジラミ、オンシツコナジラミ両種が媒介する。
  - ・ [防除のポイントNo.22、タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

## 6 ねぎ シロイチモジヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量が多い。（ほ場率：平年比 222%）（+）。
  - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対 策
- ・ ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉（葉が白く透けて垂れ下がる）を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
  - ・ 幼虫の齢期が進むと葉に食入して薬剤が効きにくくなるため、若齢のうちに薬剤防除を行う。
- (4) 備 考
- ・ [病害虫発生予察注意報第 4 号](#)を当センターHPに掲載中。

## 7 野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・ 現在のフェロモントラップによる誘殺数は平年並（±）。
  - ・ 現在の発生量は、いちご、きゅうり、きくでは多く（+）、ねぎではやや多い（+）。
  - ・ 向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対 策
- ・ 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
  - ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
- (4) 備 考
- ・ [植物防疫ニュース No. 13](#)を当センターHPに掲載中。

## 8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	うどんこ病	少	やや少	ねぎ	アザミウマ類	多	多
	アブラムシ類	やや少	平年並	にら	アザミウマ類	やや多	多
きゅうり	褐斑病	平年並	やや多	きく	アザミウマ類	少	やや少
	アブラムシ類	やや多	多		ハダニ類	やや少	平年並
	コナジラミ類	やや多	多	野菜類 ・花き類	オオタバコガ	やや多	多
ねぎ	黒斑症状 (黒斑病・葉枯病)	平年並	やや多				

### 秋の病害虫防除対策

#### ○水稲 越冬害虫

・ 再生稲（ひこばえ）は、縞葉枯病（媒介昆虫：ヒメトビウンカ）、黄萎病（媒介昆虫：ツマグロヨコバイ）の媒介虫の増殖源及び病原の獲得源になる他、斑点米の原因となるイネカメムシの一時的な生息場所となるため、早めに丁寧な耕起を行いましょ。

#### ○麦類 種子伝染性病害

・ オオムギ斑葉病や小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の予防のため、種子消毒を必ず行いませう。なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いませう。

#### ○なし 黒星病・炭疽病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬

液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

### ○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・冬春トマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。
- ・[令和7（2025）年度植物防疫ニュース No. 3](#)をHPに掲載中です。

### 農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）等に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

### 1か月気象予報（予報期間10月18日から11月17日 10月16日気象庁発表）

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。

低気圧や前線及び湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の日照時間は平年並か少ないでしょう。

### 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	30	50
降水量	30	30	40
日照時間	40	40	20

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX「栃木県農政部（@tochigi\_nousei）」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧いただけます。



当センターHP